羽と罰

楚良ノ鵺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
羽と罰

【Ｎコード】
Ｎ９０００Ａ

【作者名】
楚良ノ鵺

【あらすじ】
小学校の頃から夢だったセーラー服を着ることが出来るようになった璃奈。だが、あることがきっかけで、夢だったセーラー服を着るのを嫌になってしまう……。

第一章

――――――もう中学生か。早いなあ、さてとみんなに挨拶メール送らなきゃ。

小学生に入学し、7回目の桜の季節を迎えたわたし。昨日試しに制服のセーラー服を着て、大喜びで夜を明けた今日。

セーラー服の下に着るVネックと、スカートの下に穿く体育着のズボンのまま、6年生の時に始めたPCの前に屈んで

同じ中学に行く同級生の友だちみんなに「これからもよろしく！」というとてもシンプルなメールを送った。

返信が来なかったのもあって、仲良くしてくれないのかな？と不安になってしまった。忙しかったのかな？と気持ちを紛らわす。

返信の殆どの内容は「一緒のクラスになれると良いよね、これからもよろしく！」とか。メールは顔文字があってにぎやかだった。

1通大切にとっといておこうと思ったのは、親友の桐野美恵（きりのみえ）からの返信ではなく、新規作成メール。

内容は「璃奈（りな）、絶対同じクラス！決定！！璃奈いなきゃ、ありえないもん」と書かれている。わたしを必要としてくれる唯一の親友。

「璃奈！もう行くわよー！急いで準備して。」

1階のママが階段から上を見上げて、声をかけてきた。そういわれたので、時間を確認しようと時計を見てみると、なんと13時を回っていた。

新入生受付は13時30分までのことをすっかりメールに見とれていて、忘れていた。家から学校への時間は僅か5分、そこまで急ぐ必要性もないけど。

でもさすがに制服には着替えないとまずいと思って、慌てながらもスカートからきちんとセーラー服を着た。

大きな鏡の前に立って静かに笑うと、自分がどれだけセーラー服が似合ってないかがようやく分かった。肩幅が広いので、ごつく見え

るのが本音である。
「ねえ、紺色のセーラー服に黒いリボンはどうかと思うよね。」
そうわたしは制服の文句を言って、時間を稼ぐかのようにママに話しかけた。まあ確かに紺色のセーラー服に黒いリボンは自分的には、嫌なのだが。
どうせだったら赤色とか黄色とかそういう色に張りきって、しちゃえば良かったのに。胸元にあるリボンが一番キュートで可愛さを引き出すのにな。
「確かにママの頃は、赤色だったわ。まあ、悪いけどその制服で居て頂戴。」
やっぱりママの頃は黒色じゃなくて他の色で、首から型にかけての所からつけるリボンだったのよ。嗚呼、昔に行ってみてセーラー服を拝んでみたいわ。
なんでこんな時代に生まれてきてしまったのか。と嫌になることが最近だんだんと多くなってきていることが自分でも気がついた。
なにをやっても面白くもない、なにがあっても気に入らない、なにかがあるとすぐ落ち込む、喉の下の辺りが気持ち悪い。
などのいろいろな症状が発生していることも、原因は分かっていないままだけど、毎日がそういう気持ちで感情でいることは、嫌でも分かっている。
自分が大好きなことをしても、漫才をずっと見ていても、ゲームをしても、ＰＣをしても、生活していても、全く面白くはなかった。
心の底から笑う。という行動は一昨年からゴミ箱に捨てた。そう考えれば、わたしは顔だけ表情だけで笑っている振りをしていたのかもしれない。
「行くわよ！さあ、新しい大地に踏み出すのよ。」
わたしは大地に踏み出したのではなく、羽を広げて天へ舞い上がるのだと心の中で訂正した。ママはなにも分かっていないと昔から思っていた。
病気をしたって怪我をしたってテストで満点とったって絵で賞をも

らったって、ママは一度もわたしを褒めてはくれなかった。知ろうともしてくれなかった。
いつもわたしを褒めてくれて、知っていてくれたのは親友の美恵だけだった。髪の毛を少し切っただけでも気がついてくれたし、結ってくれたこともある。
そんな美恵はあたしにとって3度の飯より大好き。お互い自分の悩みをさらけ出したり、好きな異性のことを話したりとか、心から絆が繋がってた。
急に不安が体中に広がった。今この状況にいるわたしのことを、美恵は理解してくれるのか。嫌な顔をして、受け止めてくれなかったりしないのかと。

第二章

「璃奈！それって、＜うつ＞って言うんだよ？！分かる？＜うつ＞ってなにか。」
わたしは不安になるまでもなかったと、自分が美恵のことを信用出来ていなかったことを、反省と後悔した。美恵はいつものように状況を把握してしまった。
学校の廊下だったし、しかも美恵が驚いて思わず大声を出してしまったので声が凄く響いた。近くにいたわたしは右耳から声が入って、左耳に出て行った感覚がする。
まだ大声で喋りそうな雰囲気だったので急いで、美恵の口にわたしの手を当てて喋れないようにした。このまま大声で喋られても困ると思ったので、場所を移動することに。
人影がなさそうな所に来てみたのだが、どうやら迷ってしまったらしい。早く美恵が把握したことを教えて欲しいと言うのに、つくづく神はわたしを嫌っているな。
迷っているというのにそれでも美恵は喋り始めようとした
「＜うつ＞ってのはね、精神病でどれもこれも面白く感じなくなる、感情がなくなるとかの症状があって……1ヶ月も＜うつ＞だと病院に行かないといけない病なの。」
へぇそんな病気もこの人間にはあるのか。と、知識旺盛な美恵に対して敬意を持とうと決心していた。精神病か、わたしどうなっちゃうんだろう。
それにしても、その＜うつ＞とか言う精神病はどうやったら治るのだろうか。精神病と言うからには薬や手術で、治せる病気ではないと思った。
「その＜うつ＞っていうのは、どうしたら治るか知っってる？」
さすがにそこまで知ってないだろうと思い、美恵がしっかり答えられなくても仕方がないんだよ。と心の中でつぶやき始める。難しい

質問をしてしまったかなと不安になった。
心臓の辺りがどきどきして、顔が赤くなっているのが分かる。一瞬、自分が自分なのか感覚がなくなり現実なのか夢なのかも分からなくなってきた。
美恵は少し頭を抑えていた。どうやら、頭の中の知識を振り絞って考えているみたいだ。
何故そこまでしてわたしのことを必死に悩んで考えてくれるのだろうか。嬉しいと言う気持ちではなく、不思議とか謎という気持ちの方が多かった。
「そうだ！あれだ、治療法。確か、薬と休養だったよ！」
いきなり喋ったのでビックリしたが「え、精神病って薬で治るものなんだ」と表情だけの笑顔で感謝の気持ちを伝えた。いつか、心から笑える日が……
薬ということは病院、精神科のクリニックに行けばもらえるということだろう。休養と言われても、わたしはこれでも早寝早起きを自慢できるほどしているのに。
「休養と言うけど、心を休める。安定させる。って意味だからね。」
美恵が付け足して言ってくれたので、やっと分かった。確かに、風呂に入って半身浴してもぐっすり眠っても、心が安らいだりしたことは一度もない。
毎日毎日をただ単に過ごしていただけで、生きている意味すら無くしてしまったこともある。わたしがわたしを何処まで追い込んで行くかは、わたしにも分からないのだ。
良いことはなに1つなかった、楽しいこともなに1つなかった。いつもいつも悪い事ばかり、悲しいことつまらないことばかり、もうこの世界にはうんざり。
どうしてわたしはここまでも皆に捨てられてしまうのだろうか。わたしの何処が悪い？性格・態度？家柄・名前？悪いところ全て教えて欲しい。
そしたら自分が自分でなくなっても、悪いところをなくす。完璧で

ありたい。誰にも憎まれず、恨まれず、妬まれず、怖がられず、嫌がられずに。
何故わたしはそんな些細なことを望んではいけないの？人に愛されていたいという当たり前な気持ちだけなのに、何故こうもうまくいってはくれない？
「どうして……どうして美恵はそんなに毎日を楽しんでいられるの？」
いつも「明日が楽しみ」と言っている美恵にさりげなく尋ねてみた。きっとわたしには＜うつ＞が治らない限り分からないことなんだろうと思う。
「どうしてって言われても、美恵は次の可能性がある未来を求めているから。」
小難しい返答をくれた。次の可能性がある未来っか……分からないな。可能性があるとも限らないと言うのに求めていられるのだろう、先は見えない闇だらけなのに。
ふと自分たちが迷っていたことを思いだした。さあ、何処をどう行けば元居た下駄箱に戻れるのだろうか、いや下駄箱ではなく教室を探した方が賢明だ。
ピーンポーンパーンポーンと言う高い機械音がしたので、敏感に反応して音がした上を見た。どうやら放送のよう、もしかして迷子のお知らせ？
「宮城璃奈さん、桐野美恵さん、至急西棟３階１年１組に来てください。」
とても恥ずかしい迷子のお知らせだったのは大正解だったが、西棟３階と言われても簡単には行けそうになかった。階段は見える限りで４つある。
でも自分たちの居る場所が東棟１階と言うことは分かったのでまず２階まで階段を駆け上った。すると、中央に東棟と西棟を繋いでると思う廊下が見える。
それしかないと思った２人は、急いで廊下を走ってまた階段を駆け

上る。途中で躓いて痛かったが、今はそんなことを言っては居られないと思った。
ようやく1年生の教室が見つかった、だが1組は一番端っこでまた中央から、端っこまで駆け抜けた。全く、中学校となると入り組みが激しくて困る。
はあ、はあ。と息を切らしながらも止まらずに1組の教室の中に入った。すると思っていた通りに、周りからの冷たい反応が訪れていた。
「嫌ね、初日から遅刻なんて。1組の恥よ。」
「そうよね、初日からなんて。気が緩んでるんだ。」
わたしは中学校が始まって初日から、制服のセーラー服を着ることが嫌になった。この学校に教室に入ることも行くことも気になれなくなりそうだ。
小学生の時に「早く中学生になってセーラー服着たい」と言っていたことが、馬鹿で愚かだったと思った。これを機に理想は現実にはならないという言葉は本当だったと思う。
確かに校内放送で迷子のお知らせをされて慌てて教室に着たら、クラスの恥だし気が緩んでるんだと思われても仕方がないけど、そこまで言う必要性はない。
何も思わず言い放った一言が人にどれだけ心へのダメージを与えているかなんて、自分が言われた立場にならなければ分からない話だろう。
口は災いの元。日本人は昔からこう言う言い伝えをことわざとして残していった。それは本当のことである、言葉は幸福を呼べば、不幸を呼ぶ。
人を包み込めば、傷つけてしまう。心に残れば、無力な時もある。
それは信じるか信じないか、使いこなせるか使いこなせないかによってしまう。

第三章

珍しい同じクラスの男友だちから1通のメールが舞いこんで来た。件名はヤバイ！だったので、驚いて開いてみた一体何があったのだろうか。

そこにはわたしに関する話で、わたし自信も目を点にするような内容で「あの女……彩恵がお前のことはめるって言ってたぞ！」と書かれていた。

彩恵とは宮崎彩恵（みやざきあやえ）と言って美恵とはいとこになる存在の女で、たまたまわたし達と同じクラスになった。あいつがまたわたしになにを？はめるって言ってたのか、確かにあいつは昔から美恵を取られるのが嫌でわたしのことを嫌ってたっけ。それが今更になってそんなことをしようとは。

多分あいつは美恵と別の学校に行くことに決まって、わたしが美恵と同じ学校だったから、それが恨みの種か。全く、わたしと言う女は報われていない。

でもこれもまた仕方がないことだと思った。わたしが悪い、わたしがあいつから美恵を取らなければ良かった話だ。いつか、こんな日が訪れると恐れていた。

あいつは可哀想な女だった。幼い頃に、交通事故によって両親共々を亡くして祖父母に預けられた厄介者。祖父母はあいつが嫌いで美恵ばかりを優しくしていたと聞く。

そういう意味でもあいつは美恵が嫌いでわたしも嫌いだった。血の繋がりのあるあいつより血の繋がりのないわたしが、仲良く接し優しくしてもらっていたからだろう。

嗚呼、悪夢が全て夢だったら全て偽りだったら、世界中の誰もが困ることなく悩むことなく一生を終えられるだろうに。と冷静に頭を抱えつつもそう思った。

あのメールを見てしまったせいで、わたしは夜が明けるまで一睡も

することが出来なかった。本当に今後中学1年生を続けていけるか部屋の暗さのように真っ暗だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9000a/

羽と罰

2010年10月28日08時39分発行